

垂らした涎 拭って自我の真似  
五月蠅い殿方の 煽り立て  
嗚呼 空くは胃だろうか 将又 心なのか  
然し 唯 食す事寄り  
味わふ事 知れ

美味しそうな一品  
見事也と謂えど 此れじゃあ満たされぬ  
仮令、どんな力作等も  
腹の虫は其れじゃあ鳴き止まぬ

どうして？

其れは長い時間掛けて  
映し描いたマスターピース  
然れど直ぐ様平らげて  
啜り泣いたシェフはリンチ  
キンスタント 祀り上げて  
皆同じ味に倣って  
尚更、満足して無い様だ

もっと食べたい もっと食べたい  
卑しく奏でる喉の奥  
もっと食べたい もっと食べたい  
成らば、内臓 はち切れる迄

無碍 碍 碍にたくせ 死体を舐って  
生命を喰らう 喰らう 喰らう 喰らう  
もう 胃酸が止まんないの  
只管 無関心 無表情 無言で齧り付く  
其の姿、正に飽食

消え往く理性と 惰性の成よ  
血反吐吐いた者さえも  
何れは朽ち果てる  
故に身が滅ぶまで止めるものか

もっと食べたい もっと食べたい  
渴きを喚く眼と臓  
もっと食べたい もっと食べたい  
詰まり、口にするだけの所作

無碍 碍 碍にたくせ 死体を舐って  
其れでも紡ぐ生と死の循環も  
彼の頃 吮り付いていた 母の味も  
忘れた暁月

無碍 碍 碍にたくせ 死体を舐って  
生命を喰らう 喰らう 喰らう 喰らう  
もう 胃酸が止まんないの  
只管 無関心 無表情 無言で齧り付く  
其の姿、正に飽食

其の姿、正に飽食